

第2章 玉垂宮の鬼夜

まず最初に、玉垂宮の鬼夜の様子を見ていただきたい。

<https://www.youtube.com/watch?v=bK6dNAHS6AM>

なかなか勇壮な火祭りですね。玉垂宮の鬼夜は、1月7日に福岡県久留米市大善寺玉垂宮で行われる。国の重要無形民俗文化財で、日本三大火祭りの一つである。新年の邪気を払う追儺（ついな）の夜祭りとして知られる鬼夜は、大晦日の夜から1月7日までの鬼会神事の最終日の夜に行われる。鬼夜の火にあたれば病にかからず、難を逃れるといわれ、また魔祓い（まばらい）神事に用いられる鉾に付けられた鉾紙（ほこがみ）は安産、幸運のお札として珍重される。冬の夜空を赤く染めながら繰り広げられる勇壮な鬼夜は、約400名の氏子たちが締込み姿になり、巨大な松明に火を灯し、境内を引き回す勇壮な祭りである。この日の夜、裸の男達が松明を手に自宅から玉垂宮に集まる。

明治2年、廃仏毀釈により神宮寺だった大善寺は廃され玉垂宮のみ残って現在に至っているが、その玉垂宮とはどのような神社なのか？ 公式ホームページをご覧ください。

<http://tamataregu.or.jp/>

鬼夜は、上述したように、追儺（ついな）の夜祭りである。では、そもそも追儺（ついな）とは、どんな祭りであろうか。現在、全国的にどのような神社やお寺で行われているのか、それをまず見てみよう。代表的なものは次のようなものである。

勝福寺の追儺式（追儺会式）：<http://seiyo39.exblog.jp/17565792/>

長田神社で追儺式：<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170203-00000013-kobenext-128>

興福寺の追儺会：<http://www.kasugano.com/kankou/tsuinae/>

豊中市春日神社の追儺式：<https://togetter.com/li/935036>

その他、全国的に、至る所で行われている。数え切れないほどだ。例えば、東京都で言えば、次のようなところだ。

・[上野五條天神社](#) ・[鑑神社](#) ・[中井御霊神社](#) ・[浅草寺](#) ・[亀戸天神社](#) ・[上野五條天神社](#) ・[鑑神社](#) ・[中井御霊神社](#) その他

追儺（ついな）とは、大晦日（旧暦12月30日）、平安時代初期から行われている宮中の年中行事・鬼払いの儀式であって、「鬼やらい」「儺（な）やらい」とも呼ばれるが、これが民間に伝わって節分のルーツとなったものである。節分のルーツと聞けば、追儺（ついな）が全国幅広く行われていることの納得ができるのではなかろうか。全国幅広くおこなわれている追儺（ついな）の中で、日本最大級の追儺式は、京都の吉田神社の追儺式である。それは次のようなものである。

<https://www.youtube.com/watch?v=FO2XIa6Btp4>

平成29年2月3日の節分を前に、平安京の「表鬼門」にあたる京都市左京区の吉田神社で2日、追儺（ついな）式が行われた。災厄や不幸を象徴する赤や青、黄色の鬼が追われる様子を多くの参拝者が見守った。

午後6時すぎ、長さ約1・5メートルの金棒を持った3匹の鬼が雄たけびを上げながら境内に駆け込み、参拝者を威嚇しながら、舞殿の周囲で金棒を振り回した。その後、邪気を見抜く力を持つとされる「方相氏（ほうそうし）」が、矛と盾を手に、鬼を追い詰めた。

桃の木の弓で葦（あし）の矢が放たれ、鬼が境内から追い出されると、集まった参拝者から歓声が上がった。追儺式は平安期の宮中で行われていた儀式を現代に伝える神事で、「鬼やらい」の名でも親しまれている。3日午後11時から、古いお札を集めて**火炉祭**が営まれる。

京都市左京区の吉田神社は、立春を迎える神事の**火炉祭**を従来の形に戻し、今年平成28年から再び、大量の古いお札やお守りを境内で焚（た）き上げる。昨年まで2年間は古札に点火しない方法で実施したが、氏子や参拝者から復活を求める声が相次いだ上、課題となっていた焼却灰の処理にもめどがついた。節分の2月3日深夜、3年ぶりに境内に大きな火柱が上がる予定だ。

節分の深夜に行う火炉祭は、室町時代に全国の神々をまつる境内の大元宮前で実施したのが始まりで、古札を燃やしてお札に宿る神々に帰ってもらい、年の厄をはらって立春を迎えるとされる。今年は従来通り、境内に深さ1メートルの穴を掘り、高さ5メートル、直径5メートルの円筒形の火炉を設ける予定で、火の粉の飛散防止のために金網で囲う。

20日ごろに完成する。2月2日夜に追儺（ついな）式（鬼やらい神事）があり、3日午後11時から、**火炉祭**を行う。

火炉祭は、「お焚き上げ」とも言い、追儺式をやっていない神社やお寺でもやっている。新しい年を迎えるにあたり、一年間お祀りした御札や御守り、また古い神棚や注連縄そして正月飾り等を粗末にならぬよう、お受けになった神社やお寺にお納めし、浄火によって燃す事を「お焚き上げ」と言う。日本では、昔から「万物に靈魂（れいこん）が宿る」という考え方があった。だからこそ、「針供養」や「人形供養」などが行われるし、道具が古くなると妖怪になるという俗説もある。

「お焚き上げ」は、今までお守り頂いた神々に感謝の心を捧げ、諸願成就を改めて祈念する神事であり、我々日本人が永年培ってきた風習の一つある。その特殊なものとして、赤山禅院の「数珠供養」がある。これは、古い珠数を持参の信者の手による「お珠数のお焚き上げ」で11月23日に行われる。

以上、火炉祭について少々紙枚を使いすぎたかもしれないが、吉田神社の追儺式では、平安時代から続くところの古い伝統行事として火炉祭が行われているからだ。

それでは、私自身が非常に懐かしく思う「蘆山寺の鬼法楽」を紹介しておきたい。これは、平安時代、宮中で行われていた追儺式が市中の節分祭に変身していくその境目の行事で、追儺式といえば追儺式、節分祭といえば節分祭であり、両方の要素を含んでいる。そもそも蘆山寺というのは、天皇とご縁の深い寺院で、蘆山寺という私のホームページに詳しく書かれている。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/rosanji.pdf>

そのホームページの中に、「蘆山寺の鬼法楽」は紹介されている。

さて、話を追儺式に戻そう。

追儺の儀式は、論語にも記述があり、中国の行事がルーツである。平安時代、日本においては天皇や親王が行う宮廷の年中行事となった。その儀式の内容は次の通りである。

方相氏（ほうそうし）と呼ばれる鬼を払う役目を負った役人（[大舎人](#)）と、方相氏の脇に仕える倭子（しんし）と呼ばれる役人が20人で、[大内裏](#)の中を掛け声をかけつつ回った。方相氏（ほうそうし）は玄衣朱裳の袍（ほう）を着て、金色の目4つもった面をつけて、右手に矛、左手に大きな楯をもった。方相氏が大内裏を回るとき、公家は[清涼殿](#)の階（きざはし）から弓矢をもって方相氏に対して援護としての弓をひき、[殿上人](#)（でんじょうびと）らは振り鼓（でんでん太鼓）をふって厄を払った。

ところが9世紀中頃に入ると、鬼を追う側であった方相氏が逆に鬼として追われるようになる。古代史家の三宅和朗はこの変化について、平安初期における触穢信仰の高まりが、葬送儀礼にも深く関わっていた方相氏に対する忌避感を強め、穢れとして追われる側に変化させたのではないかとしている。

すなわち、方相氏＝鬼となった平安中期以降、追儺式に混乱があり、現在行われている追儺式の鬼には、二系統があって、追い払わなければならない鬼とそうでもない鬼とがいる。勝福寺の追儺式では4匹の子鬼が悪魔を追い払っている。長田神社の追儺式は鬼の面をかぶった氏子がたいまつを手に舞いながら、無病息災や家内安全を願う。興福寺の追儺式は毘沙門天が鬼を追い払う。豊中市春日神社の追儺式の鬼は二種類の鬼がいる。

京都吉田神社の追儺式はもっとも古い形式の追儺式で、方相氏（ほうそうし）が鬼を追い払っている。

方相氏（ほうそうし）とは、もともとは古代中国の伝承に登場する鬼神である。そのような鬼神がどのように日本に取り入れてきたかは、[鬼神について書いた「日本古代における呪術的宗教文化受容の一考察・・・土公信仰を手がかりとして・・・」という論文](#)が参考になる。鬼神は崇り神として中国古代民間でひろく信仰され、また陰陽五行思想を基礎とする占いなどの呪術的な宗教体系に取り入れられたが、それらの宗教文化が陰陽師や神祇官或いは呪禁師（じゅごんし）などによって日本社会に導入されたのである。

